

港区立郷土歴史館

歴史館だより

『東都歳事記』の中の菓子

宿澤 泉帆
(学芸員)

菓子は、日々の軽食の他に縁起物や行事食としても作られてきました。江戸市中から近郊の名所、年中行事などについて季節ごとに解説した斎藤月岑の『東都歳事記』（天保9 [1838] 年刊）には、店舗や行商で菓子売を人びと、寺社や名所で名物となった菓子、年中行事に欠かせない菓子などさまざまな菓子が描かれています。今回は『東都歳事記』の中に描かれた菓子について紹介します。

1. 菓子売を人びと

『東都歳事記』秋四の巻の麻布芋洗坂の挿絵には「〇焼」「八里半」と書いた看板行灯を掲げた焼き芋屋が描かれています。焼き芋は寛政年間（1789～1801）の頃から、木戸の番を行う番小屋などで売られるようになり、江戸の人びとにとって身近な菓子の一つでした。看板に書かれた「〇焼」は「丸焼き」、

『東都歳事記』秋四 焼き芋
(当館蔵)

「八里半」とは「栗（九里）に近い美味しさ」という洒落です。

冬五の巻の挿絵には、派手な衣装で、歌を歌ったり、笛を吹いたりして飴を売る唐人飴売りの姿が描かれています。飴は古代から薬や甘味料として利用されており、江戸時代に砂糖が流通すると砂糖を使った有平糖など、形も味もさまざまな飴が作られました。

『東都歳事記』冬五 唐人飴売り
(当館蔵)

2. 江戸の名物菓子

隅田川の堤は桜の名所として有名で、桜の花が見ごろを迎える旧暦2月頃には多くの人びとが集まって、花見を楽しみました。ここでは薄く焼いた皮で餡をはさみ、塩漬けた桜の葉で包んだ桜餅が名物と



『東都歳事記』春下二 桜餅(当館蔵)

なっており、春下二の巻に桜餅の屋台が描かれています。江戸で評判となった桜餅は全国へ広がると、関西では道明寺粉を使った桜餅が作られるなど地域に

よって形が変化しました。

3. 年中行事と菓子

『東都歳事記』には年中行事に関する記録も多く、飾り物や行事食の菓子が見られます。

夏三の巻には端午の節句の様子が描かれており、柏餅がのった盆を落とす少年や粽をのせた供物台をもつ男性の姿があります。粽は笹などの細長く丈夫な葉で餅や団子を包んだもので、神棚へ供えたり、魔除け



『東都歳事記』夏三 柏餅(当館蔵)

として飾ったりした菓子です。一方柏餅は、柏などの広い葉で餅や団子を包んで蒸した菓子で、江戸とその近郊では新芽が出るまで古葉が落ちないことから「家督が途絶えない」として、柏の葉を使った柏餅が作られるようになりました。

このように、さまざまな菓子が江戸の人びとに食べられていました。今回紹介した『東都歳事記』は、令和7（2025）年10月18日から12月14日まで開催する「暮らしの中のお菓子展」で展示予定です。その他にも、文献資料や製作道具、菓子のパッケージなどを通して菓子の移り変わりや人びとの生活との関わりを探っていきます。ぜひご覧ください。

参考文献

松下幸子著『江戸食の歳時記』筑摩書房 2022年
鈴木晋一著『たべもの史話』小学館 1999年

港区立郷土歴史館

歴史館だより

芝公園「こども平和塔」への想い

川上 悠介
(学芸員)

芝 公園にある区立みなと図書館の裏手に、高さ13.5mの白い鉄筋コンクリート製のモニュメントが建っています。これは「こども平和塔」として、戦後まもなくの昭和29(1954)年7月8日に建てられました。塔の上部には、平和の象徴であるハトがあらわれており、足元には、地球儀のある小さなステージが設置されています。この塔は、世界平和の理念を後世に伝えることを目的に田澤鏖二(明治15[1882]年～昭和42年)の発案で建設されました。

田澤は、結核の研究を行っていた医師で、3名の成人した息子がいましたが、いずれもアジア・太平洋戦争中に亡くなりました。次男と三男は、大学で医師として研究をしていましたが、徴兵され戦死。病氣療養中だった長男も、疎開先でその報を聞いた直後に病死しました。こういった背景が、田澤のモニュメント建設の発案につながったそうです。このような悲しい思いをしていた人びとが珍しくなかった中、「多くの日本人の心に起きた新たな願いは世界恒久平和の理想」※1だったといいます。それを「こどもたちの心に固く植え付ける目的」※2にこの計画は進められました。

事業は昭和22年に、建築資金の検討から始められました。当時は戦中からの物不足が続く余裕のない時代でしたが、児童・生徒の小遣いの寄付や、古新聞・古雑誌の換金で資金が集められました。この話題は時間と共に広く浸透し、企業や個人からも賛同が得られ、計495万4506円が集まりました。

この塔を設計・建設するにあたり、田澤の声がけで専門家による委員会が設立されます。塔は、子ども達が楽しく遊べるデザインとすることが決まり、委員「二十何人という多くの方々の合作」※3として実現されます。横浜国立大学建築学科教授の佐藤鑑が設計の中心となり、佐藤が示した塔の原図を基に、彫刻家の滝川美一が模型を制作。同じく彫刻家の寺畑助之丞がアレンジし現在の形に近い模型を制作しました。三羽のハトを線形で表す発想は滝川の発想で、足立区立千寿第三小学校(現・千寿双葉小学校)教諭の石毛清市が100枚強の図案を制作し、寺畑と東京都教育庁の中谷健次がその中から選びました。

これを基に、彫刻家の津上昌平が原寸図を書き、鉄板で型を作り、銅製のハトが完成しました。

この3羽のハトは、公園に集まる子どもの群衆に反応し舞い立つ姿をイメージしており、それぞれ「理想に高翔するハト」「勇気をもって直進するハト」「反省しつつ慎重に進むハト」の意が込められています。塔のデザインと共に場所の選定も進められ、現在塔が建つ、都立芝公園内、児童館の横に建設されることとなりました。児童館は昭和54年に区立みなと図書館に建てかえられます。

この設計案は、東京都知事あてに昭和28年9月、芝公園四号地への塔建設の許可申請と寄贈の請願書として提出されました。これを受け、10月29日付で東京都から建築許可が下り、11月5日に地鎮祭が行われ、大成建設による建設工事が開始されます。続いて12月1日付で都が塔の寄付を受ける事も決まりました。塔は翌年の昭和29年7月8日に完成し、除幕式と寄贈式典が行われます。この式には、港区立の愛宕と北芝中学校及び、桜川と神明小学校(いずれも現・御成門学園)計450名に加えて、他の学校からも数名ずつが参加しました。翌年から、「こども平和まつり」が開催されており、令和元(2019)年まで、当日の塔の清掃と共に続けられていました。

終戦から80年の年月が流れました。多くが戦争を知らない世代となり、戦争で大切な人を失う悲しみは、伝聞と残された資料から知るしかありません。こども平和塔は、田澤をはじめ戦争を経験した当時の人びとからのメッセージの一つで、数少なくなった戦争の記憶を今に残す貴重な資料です。



「こども平和塔」(令和7年8月撮影)

※1～3 児童平和協会『こども平和塔』昭和33(1958)年6月28日